

白石一郎

十時半睡事件帖

犬を飼う武士



いぬ か お し と き は ん す い じ け ん ち ょ う
犬を飼う武士 十時半睡事件帖

しらいしいちろう
白石一郎

© Ichiro Shiraishi 1994



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

1994年9月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——大日本印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。(庫)

ISBN4-06-185762-2

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

犬を飼う武士

十時半睡事件帖

白石一郎

講談社

目次

犬を飼う武士

桜散る

千本旗

暴風雨

勘当むすこ

弥七郎の恋

解説

石井富士弥

231 195 157 119 85 49 9

十時半睡事件帖

犬を飼う武士

犬を飼^かう武士

一

朝から小雨の降りつづく日だった。

おふじは十日に一度のわりで通っている南坊流なんぼうの茶道の師匠のもとへ行き、昼前に稽古けいこを終えての帰り道、博多湾の入江から海の水を城濠しろぼりへ引き込んだ堀割の水路に架かる荒戸橋あらとのたもとで、その男を見た。

堀割の水路の東側には土手が築かれていて、小高い土手には黒松が疎まばらに植えられている。

その松林の中を青色の雨傘を肩にした男が歩いていた。

雨の日だから傘をさした男が歩いてもふしぎはない。

おふじが注目したのは、その男が松林の中で腰をかがめ、手をのばして何かを撫でるような動作をつづけ、やがて立上ると肩にした雨傘を地面に打ち込んで立て、そのまま自分は濡

れそぼって、橋のほうへやってきたからである。

雨に濡れて歩いてくる男とおふじは橋の上ですれ違った。

若い男だ。色褪^あせた粗末な木綿の小袖に黒い小倉袴^{こくらばかま}を着けている。腰に大小を帯びているので、武士ではあった。

それにしても貧しげに見えた。おふじがふだん見馴れている若侍たちとは全くちがう。男は顔を伏せていて、すれ違った一瞬に見ただけなので、見たともいえないのだが、そんな印象をうけた。

おふじは十八歳、武家の娘にしては気性が明るく好奇心がつよい。

松林の中にぼつんと突っ立っている青塗りの雨傘が気になった。

橋を渡り終えたあと、どうしようかと躊躇^{ためら}ったのは束の間^{つかま}で、着物の裾^{すそ}を右手でたくしあげると小高い土手への道をのぼり、黒松の林の中へ入って行った。

青塗りの雨傘はところどころ亀裂の入った破れ傘だった。その傘の下に思いもかけぬものを見て、まあとおふじは声をあげた。

小犬が二匹いたのである。二匹は汚い紙の箱の中に入っていた。

生後どれくらいいたつのだろう。濡れて二匹が丸くなっている姿は、毛毬^{けまり}が二つ重なっているように見えた。色は茶褐色だ。

誰かが林の中へ捨てて行った犬たちであろう。

先ほどのあの若い武士が捨てにきたのかもしれない。おふじはそう思ったが、すぐに内心で打ち消した。

あの男が捨てに來たのなら、何も傘など立てて濡れぬようにして帰るわけがない。

どうせ捨てるのならわざわざ雨の日を選ぶこともないし、犬が濡れようと、そんなことを気にするはずもないのである。

濡れている犬を見かけて、哀れあわになつて傘を与えてやったのだろう。

やさしい人なのだとおふじは先ほどの若侍を思いだし、林の中から垣間かいま見えている荒戸橋の向うへ視線を走らせたが、もちろん若い男の姿はもう見えなかった。

翌朝、朝餉あさけがすむとおふじは小魚の煮干しと残飯少々を竹の皮につつま、荒戸橋の東側の土手に向つた。

今日は晴れていた。荒戸山から吹きおろしてくる風で遅咲きの桜の花びらがちらほら散っている。このあたりは桜の名所とされているが、木々の多くはもう葉桜になっていた。

土手へ登つて黒松の林の中へ入り、昨日の青い雨傘を探したが見えず、そのあたりに一人の男がしゃがみ込んでいた。足もとに大ききの不揃いの板切れのような材木が散乱し、それを鋸のこで挽ひいている男の回りに二匹の小犬が駈かけ回っていた。

橋の上ですれ違つた男だと、おふじにはすぐわかつた。

おふじの姿に早く気づいたのは小犬たちだ、鳴きながら走り寄つてきた。

おふじはしゃがんで持ってきた竹皮の包みを開き、地面の芝草の上に置いた。

毛毬さながらの二匹は顔を寄せ合つて煮干しと麦入りの飯を喰いはじめた。

鋸を挽く音が途切れ、こちらを見ている男の視線を感じておふじは顔をあげた。

温和しそうな平凡な顔の男だった。どこかいつて特徴はないが、眼がきれいに澄んでい

て、その眼がおふじを見て戸惑っている。

視線が合うと男は眼をそらし、俯いた。

「何をしているのですか」

気らくに声が出た。話しかけられておどろいたらしく、男は、え？ とおふじを見たが、すぐにまた眼をそらし、

「犬小屋をつくっています」

「まあ」

とおふじは眼をきらめかせた。

「この二匹のですか」

「ええ」

「犬がお好きなんですね。昨日、この二匹の犬に傘をさしかけてお帰りになるのを、私、見たのです」

男はちよつとよろたえて、顔を赤くした。

「二、三日前からここに捨てられていて、雨が降り出したので気になったもので……」

「まあ、それなら御屋敷でお飼いになればよろしいのに」

「兄も兄の嫁も犬や猫が嫌いなので……」

と男は口ごもりながらいった。そしてそれ以上話しかけられるのを避けるように再び鋸を取りあげた。

おふじは餌に夢中の小犬たちを撫でてやりながら、黙って男の仕事を見ていた。

近くの伊崎の浜あたりで拾い集めてきた板切れだろう。男は鋸のほかに鉋かんや金槌まで持ってきていた。濡れた板切れには鋸で挽く前に鉋をかける。

そのとき男は芝草に腰を据え、左足をまっすぐにのばし、右足を折り曲げて立て、両手で殆んど音もなく鉋をかけると、ふっふつと湧くようにカンナ屑が出てきた。

不揃いの板切れを鋸できれいに切り揃え、間もなく男は金槌と釘で犬小屋を組み立てはじめた。あらかじめ頭の中で小屋は出来上っていたらしく、みるみるそれらしい形が生れてくる。

おふじはおもしろくて立ち去れなかった。何もいわずに見ているのはわるいと思って、ときどき話しかけた。

「この二匹、何の犬でしょうか」

「何の？ ああ……柴犬です」

「生れてどれくらいでしょう」

「さあ、二カ月ぐらいではないですか。やっと親離れするところです」

早く立ち去ってほしそうだった男も、仕事をしながら気さくに話すようになった。

「犬のこと、私、何にも知りません。屋敷では父も母も生き物を飼うのを嫌いますから……でも可愛いわ」

「武家はみな、嫌います。飼うのは大きな土佐とか秋田です」

「どうしてかしら」

「見栄えのよい犬だけです。それと狎ちんのような珍しい犬」

「あなたは どうして犬のことにくわしいのですか」

「昔、小さい頃に飼っていましたから」

二刻（四時間）ばかりで犬小屋は出来上った。つまりおふじは四時間も男の大工仕事を見物していたのである。

男は藁束わらたばまで用意していた。それを小屋の中に敷いて二匹を入れた。見おわっておふじはほーっと溜息をついた。

男といっしょに小屋をつくりあげたような気になっていた。

「あの、私、荒戸町の三番丁に住んでいます。おふじと申します」
別れぎわにおふじは名乗った。

「私は浪人町ろうにんです。吉田奎助もくすけと申します」

「浪人町ならあちらですのね」

とおふじは堀割の川を距へだてた町並みのほうを指差した。

「お隣りですのね」

吉田奎助と名乗った男は苦笑して首を横にふり、

「身分違いですから」

といい、軽く会釈して土手をおりていった。

二

筑前五十二万石ごくの福岡藩では武士の身分禄高ろくたかによって居住区域が、ほぼ定められている。家老や中老など重役だいみょうの屋敷は城内にあり、これに次ぐ二千石から三千石の大身たいしんの武士は城の濠端から東方の大名町だいみょうや天神町てんじんの通りに面して住んでいた。

福岡藩黒田家の中堅武士団ともいえる御馬廻組おうままわりの面々は城の北方の博多湾にちかい荒戸町に集中している。その下の無足組むそくは小姓町から鉄砲町てつぱう、さらに下の御城代組は城の南方の山々の谷間に点在していた。

これほど身分によって整然と居住地を区別した藩は珍しい。在所を聞くだけで当人の藩内